

復活節第5主日

ヨハネ 13・31-33a、34-35

2022.5.15

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」。イエスが愛したように愛する。わたしたちキリスト信者にとっての信仰生活の中心的なテーマ、課題が今日の福音で示されたわけです。

わたしたちはミサのたびごとに、「わたしが愛したように」とおっしゃるイエス様がどのように愛したかを記念しています。それは、イエス様は神のようにご自分の全てを、他の人を生かすために与えられたということを記念しているし、そのイエス様ご自身をわたしたちの中にお迎えするというのがミサなわけですが、わたしたちはイエス様と同じように、ご自分の全部を他の人を生かすために与えるイエス様のように愛する、そのゴールに向かって招かれている。そのことをいつも心に留めておくことが、信仰者として大切なんですけども、一方でまた、自分はまだそのゴールには到達していないんだという現実、そのことも受け入れておく、それも同じように大切なんだと思います。

ゴールに到達していないのに、ゴールに到達しているかのようなフリをするということは危険だし、わたしたちはそのようなフリをすることを求められてはいない。今の自分を生きる。そうじゃないと、世の中には、自分の望んでいるものを相手から獲得するために何でもするという人がいます。そういう人たちのペースに巻き込まれていっちゃうということがあるんだろうなという気がします。皆さんが体験するか分からないけれど、でも、身近なところにあると思います。例えば、信者同士でないご夫婦だったら、奥さんやご主人に「おまえ、キリスト信者なのにそんなこと言っているのか」とか。でもそれはキリスト信者であろうがなかろうが、なんか言われれば言い返したりしますよね。

それは身近な例だけど、例えば教会にいたり、あるいは、わたし今は東京カトリック国際センターという外国人の支援の教区の部署で担当したりしてますけど、そういう中で、教会にいれば、「ここは教会なんでしょ。愛してくれるんでしょ。わたしに1万円ください」とかね、国際センターでも食糧支援とかし

てるけど、そうじゃない自分の望んでいる物を「教会なんだからそれをわたしに渡すべきなんだ」というようなことを言うてくるような方っていますね。

で、「イエス様が全部与えたんだから、自分も与えなきゃいけないのかな」という気持ちになっちゃうけど、本当に心から、心が動いて「渡したい」と思うなら渡せばいいんだけど、でもそうじゃない違う判断で、「後でどこかに行つて、『あその神父は酷い神父だ』って言われたくない」とか、あるいは、『カトリック教会はなんにもしてくれなかった』っていうようなことを言い振らされても面倒だなあ、あるいは、「ここにずっと居座られても面倒だなあ」という、愛じゃない違う判断で相手のペースに乗ってしまうっていうことは幸せな結果にはならないです。心の中でその相手を憎んだり、軽蔑したり、あるいは、おんなじようにしない他の誰かを責めたりとか。

そういうような、ゴールに到達していない、酷い、あるいはケチな人間であるということは事実なんです。一方では、わたしはカトリック教会を代表している者でもない。だけど、優しい人かのように振る舞い、カトリック教会全体を代表しているかのように振る舞う。自分が本来そうでないのに、そのような者のフリをするっていうことは、やっぱり苦しい結末以外にはないでしょうね。そして、それをしなさいって言われているのではないような気がします。

今の自分が心から望んで生きる。そこからですよ、出発は。大切なことは、等身大の自分というものをまず受け入れるということですね。だから、例えば「お金ください」というような人に対して、「いや、そういうものをあげるのが愛じゃないから」とか、そういう一般的な理論で自分のことを正当化する必要もないんですよ。「わたしは自分のお金をあなたに、知らない人にあげたくないのであげません」と言えればいいだけなんです。それは今の自分の心からの、そういうことに皆さんが会うかどうかかわからないけど、今、教会で体験することの自分の例をお話ししているわけなんですけど、それで「酷い」と言われたら、確かに酷い。でも、今それをしたくないのは事実でありますからね。

繰り返しになっちゃったけど、結局大切なことは、自分が無理をする、自分が自分でない者のフリをするではなくて、等身大の自分であることを自分に許す。それが愛の第一歩、土台のような気がします。自分が無理をしているときに、別の誰かのようにフリをしているときに、それは自由じゃない。自由じゃないときには、いかに努力しても、やっぱり救い、幸福なものにつながっていくっていう可能性は低いと言っているんじゃないかなと思います。

でも、一方で、心から本当にしたくて誰かを愛する、心から何かをしてあげ

たいていというような瞬間とか相手っていうものは、みんな誰の中にもあるんじゃないかなと思います。なぜならば、神様にみんな創られていて、それぞれ神様の愛をいただいているんだから。それは100%発揮されていなくても、でも何かのところでは、自然な自分の思いから誰かを愛するということがある。自分は人間を愛せない、今の自分にとって大事なのお世話をしてるお花だけ、あるいは今一緒に住んでるペットだけ、っていうかもしれない。でもそれだって大切な一人。

共に歩もうとされるイエス様に出会い直しながら、それぞれの自分の在り方で、そして自分の自由な望みによって愛していくことができますように、神様、イエス様の呼びかけに心を開きたいと思います。